

令和 3 年 6 月 5 日現在

機関番号：14501

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2017～2020

課題番号：17K13588

研究課題名(和文) 手工芸による暴力・災禍の記憶表現と地域間対話-チリのアルピジェラを中心に

研究課題名(英文) Memories of War, Conflict and Disaster in Handicrafts and Its Potential for Communicating across Borders: A Focus on Chilean Arpilleras

研究代表者

酒井 朋子 (Sakai, Tomoko)

神戸大学・人文学研究科・准教授

研究者番号：90589748

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,000,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、震災、戦争、政治暴力の経験を共同作業として綴る活動の意義と、ことば以外の手法による歴史証言の可能性を探った。軍政期チリで発達したタペストリー作りや、戦争あるいは東日本大震災にかかわる手工芸作品の展示活動と調査を通じ、暴力の記憶とともに生きる上で手仕事活動がもつ意味や、手仕事活動が媒介するかわりの重要性が明らかになった。また政治暴力と災害のような文脈の異なる歴史経験であっても、困難な状況を共同で生き抜こうとする日常のミクロな実践のなかには共通性が見出された。その共通性はときに、手仕事作品の手ざわりや素材の象徴性を通じ、言葉や地域的條件の差を超えて人にうったえかけるのである。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究プロジェクトは災害や暴力の体験にかかわる手仕事作品を分析するとともに、それらの展示企画を行い、その実践過程で見えてくることをも検討対象に含めた。またその展示実践からえた経験を、国際的に活動する研究者やキュレーターとも共有することで、非言語的な媒体を通じて伝わりうるものを明らかにすることができた。戦争、政治暴力や震災の記憶、およびそれらの体験の表現は、過去30年間、社会的にも人文・社会科学的にも幅広い関心を集めてきたが、プロの表現者ではない人間たちによる非言語的な作品や表現の分析はほとんど見られなかった。ゆえに本研究の成果は記憶継承の社会活動にとっても学術的にも大きな意義をもつと考える。

研究成果の概要(英文)：This research project studied handicrafting activities that deal with the experience of disaster, war, or political violence. It also explored the potential of non-language historical testimonies. Through looking at arpilleras, or tapestries sewn in Chile during the military dictatorship, and handicrafts related to the experience of WWII and the Great East Japan Earthquake, the project examined the significance of handiwork for lives with violent memory, as well as the role of community workshops that build up social networks. The project held an exhibition as part of its research activities, which cast light on the commonality in the people's everyday micro practices of coping with difficulties through mutual help among neighbours, even if the historical contexts and the social/political nature of sufferings are varied. The commonality can be communicated through the texture and physical symbolism of handicrafts over the language and regional barriers.

研究分野：社会・文化人類学

キーワード：手工芸 チリ アイルランド 記憶 展示 政治暴力 東日本大震災 共同作業

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

1. 研究開始当初の背景

本研究プロジェクトは、私(研究代表者・酒井朋子)が調査フィールドとするイギリス領北アイルランドにおいて、南米チリの壁かけ(アルピジェラ)に出会ったことをきっかけとしている。北アイルランドは20世紀後半に長期の紛争を経験した土地であり、2010年代においてもなお、紛争によって強化された住民分断は社会生活のさまざまな場面に影響を及ぼしていた。この北アイルランドで、軍事独裁期(1973-1990年)のチリで作られはじめたアルピジェラの展示・制作活動が行われていることに、私は関心をもった。アルピジェラは異なる歴史経験のあいだの対話の可能性を示すひとつの事例であるように思われたのである。

また、地域の作業所に集まって縫われるアルピジェラ制作のありかたは、東日本大震災後に各地の避難所や被災コミュニティで生じてきた手仕事活動をも思い起こさせた。共同の手仕事活動には、社会やコミュニティが全体として大きな困難にさらされたときに重要となる何らかの要素があることが推測された。

そうしたきっかけから、本研究プロジェクトでは、アルピジェラやその他の戦争・政治暴力・災害にかかわる手仕事作品を集めた展覧会を行い、その過程で見えてくるものを検討すると同時に、展覧会の実施経験を世界の他地域で活動する研究者・キュレーターらと共有することにした。それを通じて、一般市民がことば以外の形態で紡ぐ歴史証言と物語表現の可能性を明らかにしたいと考えたのである。「グローバル化」によって人の移動が活発化するなか、市民のあいだに他者の歴史経験に対する想像力を喚起することは、実は焦眉の課題となっている。本研究は、その課題に対して一つの可能性を示すことを試みるものであった。

2. 研究の目的

本研究の目的は大きく分けて二つあった。第一に、暴力の経験を共同作業として綴っていく活動の意義、および、ことば以外の手法による歴史証言の可能性を明らかにすることである。第二の目的は、手工芸を用いた記憶表現が、国・地域の境界を超えて、異なる歴史経験をもつ市民のあいだに生み出しうる対話や影響関係について明らかにすることにあつた。

事例としては、上でふれたチリのアルピジェラや、アルピジェラ制作活動に刺激を受けて生じた紛争後北アイルランドにおける手工芸活動、および東日本大震災後の手仕事活動などに焦点を当てた。

3. 研究の方法

研究はおもに以下3つの方法で行なった。

(1) テーマに関連する手工芸従事者や、支援活動・普及活動従事者への調査

震災や政治暴力の体験をもとに、あるいはそれらを主題として手工芸作品を作っている人々への聞き取り調査、作品の調査、作成現場の調査、作成をとりまく社会環境の調査となる。

具体的には、チリのアルピジェラ、北アイルランドにおけるタペストリー制作、東日本大震災の被災地での手仕事活動を取り上げた。2017年秋に、政治暴力を主題にタペストリー制作活動をおこなうイングランド在住の作家への聞き取り調査を行った。2018年には国内で最大のアルピジェラコレクションを有する長野県の大島博光記念館を訪れた。また2019年秋には北アイルランドでの調査を行っている。北アイルランドのテキスタイル・アーカイブ Conflict Textiles のキュレーター、ロベルタ・パチチ氏は、イギリス・アイルランドを中心にヨーロッパ各地でチリのアルピジェラの手法、社会背景を紹介し、各地の人々に自身の歴史経験を表現することをうながす活動を行っているが、彼女とは2017年から2020年にかけて継続的に電話で連絡をとり活動の様子を聞き取った。

また、福島県楢葉町や富岡町を年1、2回訪れ、手仕事活動やその他の文化活動、および原発事故後の社会環境の変化について調査した。とくに楢葉町では、等身大カカシ人形を制作する女性たちを調査した。このカカシ人形は原発事故後に居住者が激減したふるさとにひと気を取り戻すために作成され、町の各所に置かれているものである。災禍の経験を直接描いたものではないが、そうであるからこそ、災禍の経験と手仕事活動の多様なかわりのありかたを示す事例ともいえた。このカカシ人形のうち数作品は、「記憶風景を縫う」展(後述)の展示作品として借り受けている。

なお、チリのサンティアゴにおいて、現在もアルピジェラ制作にかかわっている作り手に調査をするとともに、短期間の展示を行うことも当初予定していたが、研究代表者の異動や、新型コロナウイルスの流行などのために断念せざるをえなかった。実現していれば手仕事活動の地平、展示という研究・社会活動の可能性の二側面ともに、考察の射程がはるかに広がったと考えられるため、残念なことである。なんらかの機会に実現したい。

(2) 戦争、紛争、災害にかかわる手工芸作品の展覧会の実施、およびその実施経験の反省的検討。

2017年に「記憶風景を縫う」と題した展覧会(詳細は後述)を実施した。研究代表者のほか、東北学院大学の宮本直規氏、キュレーター長内綾子氏、編集者の高橋創一氏からなる実行委員会を形成し、企画を準備した。仙台に基盤を置く実行委員会として、展覧会の焦点の一つは、震災経験の記憶表現を考えるにあたってアルピジェラが提示しうるものや、東日本大震災後の被災地における手仕事活動の意義と、チリのアルピジェラ制作のあいだの共通性などにおいた。

出品作品の制作者のうち多数とは、予備調査の段階から関係を構築していた。プロジェクト期間中は、すでに培ったつながりをいかし、作品制作の動機やその背景にある災禍の体験などについて、より分け入った部分まで聞き取りを行うことができた。

展示をみずから作り、各所と調整する経験を内部から記録し検討することを通じ、災禍の記憶継承の可能性や困難と、学術的な成果発表とは異なる形での研究の成果公開のありかたを考えることを、ここでは目指した。参加者のフィードバックも、非言語的な記憶表現の可能性を考える上で重要な検討情報となった。

展覧会実施にあたっては、実行委員のほか、東北学院大学、同志社大学、長崎大学の各学生、および関心ある市民の方々が展示スタッフとして関わり、広報活動の一部、設営・撤収、受付を担った。

(3) 政治暴力の記憶と展示について関心を共有する研究者・キュレーターとの対話

2で述べた展示活動を、世界の他の地域で同様の問題関心をもって活動する研究者やキュレーターとの間で共有・検討し、展示を通じて異なる歴史経験のあいだのコミュニケーションの機会を設ける可能性について対話・考察した。具体的には、まず2017年11月に、戦争や災禍の経験とテクスタイル作品をめぐる3日間の国際セミナー(コロキウム)が英領北アイルランドにて開催された。ここでつちかわれたネットワークを通じ、その後は電子メールなどのやりとりで、情報交換や考察を深めた。展示活動の物理的、事務的限界や、学術研究と展示活動で重なり合う部分・相反する部分なども考察の対象となった。

4. 研究成果

(1) テーマに関連する手工芸従事者や、支援活動・普及活動従事者への調査

おもに以下のことが明らかになった。第一に、手仕事作品が有する非言語的媒体としての記憶表現の可能性である。必ずしも写実性を追求しない手仕事表現を通じてはじめて、人は自身とその周囲の人間関係を形成してきた社会的な「場」の主観的記憶を表現できることがある。また言語的な時制をもたない絵画的・裁縫作品的な表現においては、複数の時代の出来事一つの作品のなかに表現可能であり、それゆえに愛着と苦痛のような一見すると相反する感情を同時に含みうるものを生み出すことが可能である。第二に、共同作業としての手仕事活動の社会的な意義である。たとえば福島県楡葉町においては、避難指示の解除後に町に戻った人々にとって、共同作業としてカカシ人形を作っていくこと(かつ、自身がすでに有する裁縫という技術を駆使し、物理的に忙しく手を動かしながらものを作ること)は、社会とのかかわりを再想像する大きな意義をもっていた。

これらの内容は、2017年の展示およびその関連イベントにおいて、および2020年の『社会学雑誌』の特集(後述)のなかで、研究成果として発表されている。

(2) 戦争、紛争、災害にかかわる手工芸作品の展覧会の実施、およびその実施経験の反省的検討。

これについては、2017年5月から9月にかけて、展覧会「記憶風景を縫う-チリのアルピジェラと災禍の表現」を、仙台(東京エレクトロンホール宮城)、京都(同志社大学寒梅館)、長崎(長崎県美術館)にて開催した。京都では同志社大学の尹慧瑛氏、仙台では長崎大学の友澤悠季氏に現地実行委員を担当いただいた。展示作品は、北アイルランドのコレクションConflict Textiles、長野県の大島博光記念館からチリ、アイルランド、スペイン等で制作されたアルピジェラを借りたほか、インドの自身に関連する作品を、人類学者・金谷美和氏よりお借りした。これらアルピジェラと世界のテクスタイル作品について来場者がより理解を深めることができるように、Conflict Textilesのバチチ氏をキュレーションのアドバイザーとして招聘し、作品ガイドと関連シンポジウムの話者をも担当いただいた。なおこのシンポジウムでは、チリ軍政下の一般市民の暮らしを日本に紹介してきた東京外国語大学名誉教授の高橋正明氏、および東日本大震災の記憶継承の問題を論じてきた郭基煥氏にコメンテーターとして登壇いただいている。

東日本大震災に関わるものとしては、楡葉町のカカシ人形を展示し、また被災コミュニティでの手仕事活動の意義を考えるトークイベント(話者:まちづくりコーディネーター・足立千佳子氏)も開催した。

巡回展では、これら被災コミュニティにおいて手仕事やアルピジェラ的な表現が持ちうる可能性を、広く各地に伝えていくことを目指した。さらに長崎では、長崎の「被曝詩人」として知られる福田須磨子の人生と手仕事に焦点を当てた。福田が被曝の後遺症とたたかいながら作成した布作品や人形を展示する特別コーナーを設置したほか、ガイド・ツアーのコメンテーターとして「長崎の証言の会」山口響氏にご協力いただいた。福田の半生を描いたドキュメンタリーの

上映会も行なわれた。

以上を通じて、展示を訪れる者や展示に関わる者が、自分自身の歴史経験の新しい表現可能性を探求するとともに、他者の経験とのつながりを模索する機会をつくることを、本事業では目指した。

記録できた来場者数は三会場合計で1,502名となった。展覧会タイトルにもある「アルピジェラ」が、これまで日本社会でほとんど認知されていない題材だったこと、および京都、長崎では東日本大震災は地理的・心理的にも「遠い」はずのテーマであったことを考えれば、少なくない来場者数であったと考える。

確認している限りで以下のメディアにて、展覧会について紹介・報道された。

- 『河北新報』2017年5月22日(pdf添付)
- 『毎日新聞』宮城版 2017年6月2日
- 『京都新聞』2017年7月2日(pdf添付)
- 『毎日新聞』長崎版 2017年8月29日
- 『長崎新聞』2017年8月30日(pdf添付)
- 『読売新聞』西部版 2017年8月30日
- Sendai Motions 2017年5月24日
- (<https://www.s-motions.com/blog/arpillera-exhibition-in-sendai>)
- TOHOKU360 2017年5月28日(<http://tohoku360.com/arpilleras/>)



図1 展示会場の様子(仙台展)



図2 展示会場の様子(京都展)



図3 長崎でのアルピジェラ制作ワークショップ



図4 展示作品一例「教会の中の児童食堂」
(大島博光記念館所蔵作品)
(写真はいずれも酒井撮影)

なお展覧会にあわせ、図録『記憶風景を縫うーチリのアルピジェラと災禍の表現』(「記憶風景を縫う」実行委員会、2017年)を発行している。展示作品の解説や、関連する主題のコラムも収録したもので、本プロジェクトの重要な成果出版のひとつとなった。

(3) 政治暴力の記憶と展示について関心を共有する研究者・キュレーターとの対話

これについては、2017年11月に北アイルランドにて開催された国際コロキウムへの参加から始まる対話と、2020年9月の国際平和博物館会議(オンライン開催)が重要なものとある。

2017年11月のコロキウムには、ヨーロッパ、ラテンアメリカなど各国から10名の研究者や美術関係者が集まり、経験や知見を共有した。研究代表者・酒井はこのセミナーにて展覧会「記憶風景を縫う」について報告した。このコロキウムでは手仕事と暴力の記憶表現にかかわる研究ネットワークが構築され、英国のAberystwyth大学の研究グループのブログStitched Voicesにて酒井が本研究プロジェクトについての報告を寄稿することにもつながった(2018年2月、

“Textiles dealing with everyday memories of war, political violence and disaster: The Stitching Memoryscape exhibition, Japan, 2017”, <https://stitchedvoices.wordpress.com>。

以上の展覧会とコロキウム、および手仕事作品制作者への調査の成果は、『社会学雑誌』第37号に、特集「記憶風景を縫う」(2020年8月)として発表されている。研究代表者・酒井が「序」において全体をまとめ、ロベルタ・バチチ氏による翻訳原稿「『争われる空間』のアルピジェラ」、2017年開催のシンポジウム記録、長崎展実行委員の友澤悠季氏の論文「生きてあることの証—福田須磨子とギンナン人形・壁掛け」が続く内容となっている。なおバチチ氏原稿の翻訳にあたっては、神戸大学大学院人文学研究科の大学院生に共訳作業を担当していただいた。

(4) ・道徳と倫理の人類学にまつわる理論的な考察

戦争・震災・政治暴力の体験の継承や、暴力的な経験を抱えつつ他者とかかわること(あるいは暴力的な経験を抱えた他者とかかわること)をめぐる本研究は、その考察の過程で道徳や倫理の主題にもかかわるものとなっていった。2018年度から道徳と倫理の人類学にかかわる理論的考察を深め、まず2019年度に『社会学雑誌』にて試論となる論文を発表した。近年、道徳/倫理の人類学として主に英語圏で興隆している議論は、社会規範としてのみ道徳をとらえるのではなく、日常的な営為や、日々の私的な人間とのかかわりのなかに人間の倫理性を見ようとする傾向があり、本研究の問題関心を非常に重なるものである。この探求の結果、本研究の理論的基盤はさらに堅固になったといえる。

その後、他の地域や、記憶研究とは異なる主題を対象とする人類学者とも対話を深め、2020年度の日本文化人類学会にて、研究代表者酒井が企画者となって、道徳/倫理の分科会発表を行った。この分科会の成果はさらに『文化人類学』の特集として採択されることが決定しており、現在、特集刊行のプロセスが進んでいるところである。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計6件（うち査読付論文 1件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

〔学会発表〕 計5件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 2件）

1. 発表者名 酒井朋子
2. 発表標題 紛争体験の語りにおける笑いについて-北アイルランド紛争における暴力と日常
3. 学会等名 日本文化人類学会第53回研究大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Tomoko Sakai
2. 発表標題 "Memoryscape and everyday materiality in arpillera"
3. 学会等名 Textile Language of Conflict (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 酒井朋子
2. 発表標題 「倫理的転回」が切り開く視界、およびその危うさとは 道徳 / 倫理の人類学の興隆を考察する
3. 学会等名 日本文化人類学会第54回研究大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 酒井朋子
2. 発表標題 時間と人間経験をめぐる道徳 / 倫理 文脈、実験、そして不道徳なるもの
3. 学会等名 日本文化人類学会第54回研究大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 酒井朋子
2. 発表標題 Transnational collaborative work and the arpillera collection at the Oshima Hakko Museum, Japan
3. 学会等名 The 10th International Conference of Museums for Peace (INMP 2020) (国際学会)
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 田中 雅一・松嶋 健 (編)	4. 発行年 2019年
2. 出版社 京都大学学術出版会	5. 総ページ数 589
3. 書名 トラウマ研究 2 ト라우マを共有する	

1. 著者名 「記憶風景を縫う」実行委員会	4. 発行年 2017年
2. 出版社 「記憶風景を縫う」実行委員会	5. 総ページ数 88
3. 書名 『記憶風景を縫う - チリのアルピジェラと災禍の表現』	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	尹 慧瑛 (Yoon Haeyoung)	同志社大学・グローバル地域文化学部グローバル地域文化学科・准教授 (34310)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	友澤 悠季 (Tomozawa Yuuki)	長崎大学・環境科学部・准教授 (17301)	
研究協力者	宮本 直規 (Miyamoto Naoki)	東北学院大学・教養学部・講師 (31302)	
研究協力者	高橋 正明 (Takahashi Masaaki)		
研究協力者	大島 朋光 (Oshima Tomomitsu)	大島博光記念館	
研究協力者	長内 綾子 (Osanai Ayako)		
研究協力者	高橋 創一 (Takahashi Soichi)		
研究協力者	ロベルタ パチチ (Roberta Bacic)	コンフリクト・テクスタイルズ	
研究協力者	ブリッジ ドハーティ (Breege Doherty)	コンフリクト・テクスタイルズ	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------